

## 事例番号 042 市民、行政、大学等の連携による地域通貨の試み(千葉県銚子市)

### 1. 背景

太平洋に面する銚子市は近世を通じて物流港(米等)、漁業、醤油産業を中心に栄え、近代以降はそれらに食品製造・加工業が加わって発展してきた。しかし最近では主力産業の一つであった水産業の水揚量が激減し、水産加工など関連業も不振に陥った。そのため、かつては近隣を含む広域商圈を有していた市中心部の商業も不振に陥り、地域経済の衰退が顕著となった。人口は昭和40年代前半の9万3千人をピークに減少を続け、2005年4月には約7万6千人になっている。

中心商店街は人口流出の影響も強く受け、今や銚子電鉄の廃止や市内唯一の核的大規模商業施設である百貨店の閉店なども話題に上るようになった。

こうした状況下、市は大学誘致に積極的に取り組み、千葉科学大学の誘致に成功した。2004年に開学した同校は学校法人加計学園が経営し、薬学部と日本初の危機管理学部の2学部を持つ。学年定員数は410名であるが、入学生は2004年度が530名、2005年度が621名となり、両学部とも需要が大きいことがわかった。今後は学生・教官の定住と地域経済への波及効果が期待されている。

このような動きがある中、2003年に「銚子まちづくり市民の会」が発足した。同会は、市民がまちづくりの主体であるという認識の下、「銚子をもっともっとステキなまちにしていきたい」という意識から地域通貨「ぼらん」の発行・管理等の活動を行っている。その後、地域再生計画に基づいて市により地域通貨「セグロウ」の導入実験が行われた。以下では地域通貨に関するこれらの取り組みを中心に紹介する。



銚子市の位置 (資料)銚子市ホームページ)

### 2. 目標

銚子市の地域再生計画では、以下の諸活動を通じて地域内消費を拡大させ、地域経済の活性化を図ることが目標として掲げられた。

- ・ ボランティア活動や市民活動を通じ、地元住民と大学生との元気なまちづくりに向けたコミュニティの醸成を図る
- ・ 既存の大学生を支援するための地域商品券交付事業や市民グループがすでに実施した地域通貨の実験結果などを生かして、住民基本台帳カードを活用した新たな地域通貨システムの導入を行う
- ・ 銚子の観光、地場製品のPRや展示即売などを東京日本橋や築地で行う「銚子まつり」、さらに観光戦略としてフィルムコミッション活動を推進し、映画やテレビドラマなどのメディアを通じ全国に情報発信する

### 3. 取り組みの体制

「銚子まちづくり市民の会」が地域通貨「ぼらん」の発行・管理等のまちづくり活動を行っている。また、銚子市が実験的に地域通貨「セグロウ」を発行したが、その参加者は個人、千葉科学大学学友会、及び銚子ボランティアガイド観光船頭会等の民間団体であった。ポイントは銚子ポーターなどの公共施設が受け入れた。

### 4. 具体策

#### (1) 「銚子まちづくり市民の会」の活動

「銚子まちづくり市民の会」(会員数約 100 名)は、市民と行政が協働のまちづくりを推進することを活動の基本方針として、以下の 9 つの部会を設けて活動している。

- ① 都市基盤整備部会(道路整備、都市開発、交通問題など)
- ② 安全な暮らし部会(防災、消費生活問題など)
- ③ 環境部会(景観、ごみ対策、自然・生活環境問題など)
- ④ ひとづくり部会(教育、生涯学習、芸術・文化・スポーツの振興問題など)
- ⑤ 保健・福祉部会(保健、高齢者・障害者等福祉問題など)
- ⑥ まちの活性化部会(観光・商業など地場産業の振興問題など)
- ⑦ 大学部会(大学を核とした文教のまちづくりに関する問題)
- ⑧ 地域通貨部会(地域通貨に関する問題)
- ⑨ 特別部会:行財政部会(行財政・市町村合併に関する問題)

ここでは地域通貨部会の活動を紹介する。地域通貨の名称は「ぼらん」であり、会員を対象に発行している。会員になることを希望する人は、名前、住所、自分が提供できる助け合いサービス等を記載した文書を事務局に提出して登録を受け(無料)、事務局より配布された助け合いサービスリストと協賛店リスト(2005年10月現在、23)を参考に、サービスや物品の交換をする。事務局はこの交換には原則として関与しない。

サービスを受けるためには、助け合いサービスリストの中から希望するサービスを提供してくれる人を選び、直接連絡をする。そして当事者同士で日時と「ぼらん料金」を決め、サービスと「ぼらん

券」の交換をする。それに要する経費は利用者が負担する(例:草刈機の燃料代、送迎等の旅費(目安として30円/走行km)等)。

「ぼらん券」は、決められた換金日に一定の換金率で円と交換することができる。換金率は当該「ぼらん券」の取引回数により異なる。取引回数がゼロの「ぼらん券」は100ぼらん=90円であるが、取引回数が5の「ぼらん券」は100ぼらん=100円である。このような仕組みで「ぼらん券」の流通促進を図っている。



銚子まちづくり市民の会が発行管理する地域通貨ぼらん

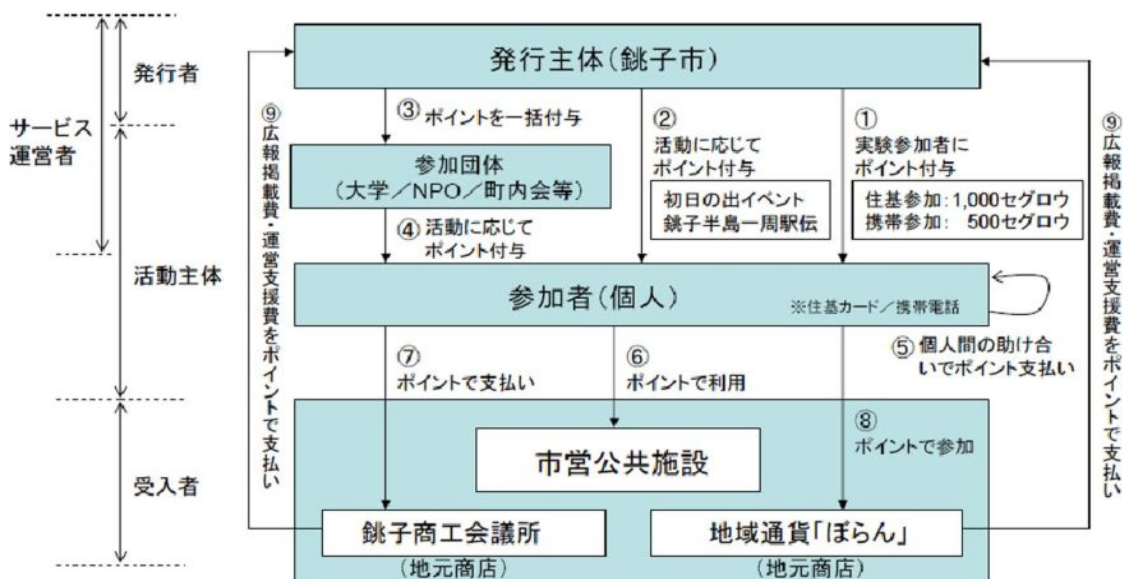
(資料:銚子地域通貨「ぼらん」のホームページ)

## (2) 地域通貨「セグロウ」の取り組み

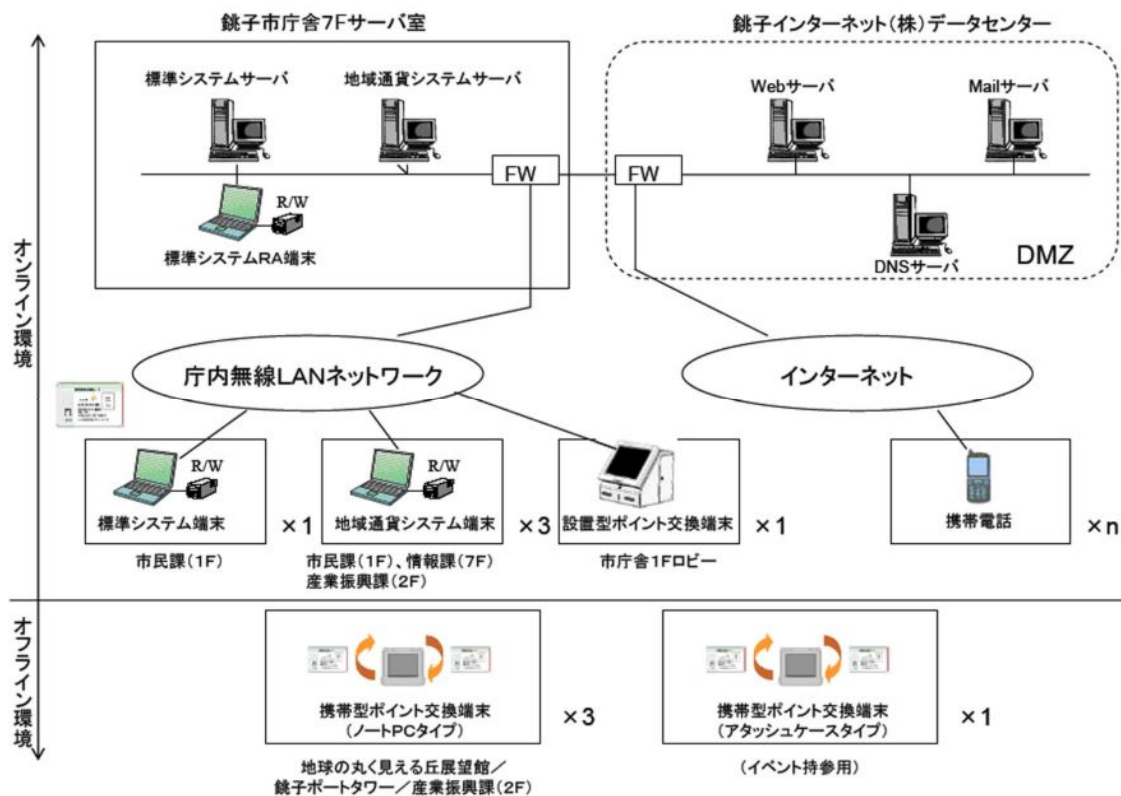
銚子市は、地域再生計画の認定を受けて2005年12月から2006年1月まで住民基本台帳カードを活用した地域通貨モデルシステム実証実験事業を行った。その概略は以下の通りである。

- ① 地域通貨名称は「セグロウ」である。「海(sea)」+「成長する(grow)」と、銚子港で一番の水揚げ量を誇るセグロイワシ(正式名称=カタクチイワシ)とを掛けている。
- ② 住民基本台帳カード又は携帯電話の活用により、紙幣を発行せずコンピュータ通信でポイントを交換するという、電子マネーと同様の流通システムを採用している。
- ③ 発行者、活動主体、受け入れ者の関係は下図のようになっている。個人参加者には、住民基本台帳カードでの参加申し込みの場合は初期ポイント1,000セグロウ、携帯電話での参加申し込みの場合は同500セグロウが与えられる。実証実験期間中のみ地域通貨「ぼらん」及び銚子商工会議所発行の地域商品券との交換を行った。
- ④ 地域通貨利用の対象となるイベントとして、観光案内、通学路のパトロール、料理コンテスト、清掃活動などが行われた。
- ⑤ 数値目標として、2005年度地域通貨参加者1,000人(大学生含む)、観光客入込数10パーセント増加を掲げた。

参加者の実績は、住民基本台帳カード184人、独自カード12団体、住民基本台帳カードと携帯電話併用14人、携帯電話78人となった。通貨発行額は382,400セグロウであった。参加者数は数値目標に及ばず、観光客入込数の実績は不明である。

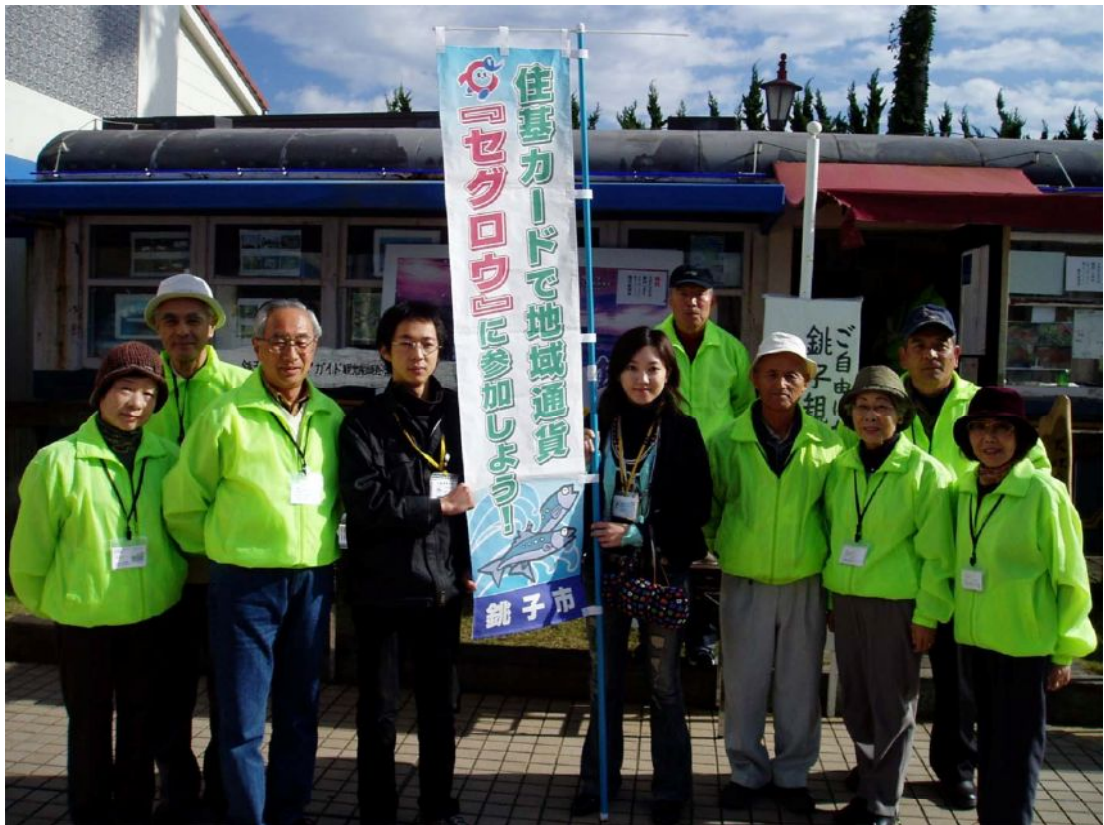


セグロウ流通の仕組み (資料:銚子市ホームページ)



電子情報システムにおけるセグロウの流通 (資料:銚子市ホームページ)





2005年12月 実証実験スタート (写真提供:銚子市)



千葉科学大学学友会による清掃活動 (写真提供:銚子市)

## 5. 特徴的手法

市民団体の先駆的な活動を受けて、同団体とも連携しつつ市が地域通貨の実験を行ったが、その際、大学など多様な主体を巻き込み、電子マネーの形態で試行したことが特徴的である。

## 6. 課題

実験期間が短かったことから、地域通貨の常時運用の可能性、地域経済に対する効果、参加者拡大の可能性等を検証するためには更なる試みが必要となっている。年間を通して、銚子みなとまつりや銚子マリーナ国際トライアスロン大会などのイベントで地域通貨を活用することが検討されている。

(参考・引用文献)

銚子市ホームページ

銚子まちづくり市民の会ホームページ

内閣府ホームページ

銚子市(2006年):銚子市地域通貨「セグロウ」事業実施報告